

子どもと算数を創る

—個別最適な学びと協働的な学びの実現を目指して—

小豆

1 題設定の理由

子どもと教師が算数を創る際に、個別最適な学びと協働的な学びの視点を取り入れることで、算数のおもしろさや便利さ、よさなどを実感させ、個々に課題のある子どもたちの可能性を引き出せると考え、本主題を設定した。

2 研究の仮説

本学級の児童の実態として、自分の考えをもちにくい、受動的で学びに向かう意欲が低い、数と計算の領域において形式的な手続きにとどまり正しく計算の意味を理解していないなどが見られる。そこで、①既習を整理し、児童と単元計画を立てることで主体性を育めるのではないかと。②算数リーダーを中心に置いたグループ活動を取り入れることで、全ての児童が協働的な学びを通して課題解決に向かえるのではないかと。③それらの学びの過程を通して自分にとって理解しやすい考え方を身に付ける力を養えるのではないかと。以上3点の仮説を立て実践を行った。

3 研究の内容

(1) 出会いの工夫

単元導入時に、児童と一緒に単元計画を行った。その際、既習を整理することで学びの状況を把握し新しい問いに気付かせるようにした。児童の意識の流れから解決したい課題を設定したことで主体的に学習に向かうことができた。

(2) 協働的な学びの場の工夫

① 算数リーダーを中心としたグループ活動

グループで考え方を選択し、算数を得意とする算数リーダーを中心に、解決方法を話し合った。「単位の考え」や既習と繋いだ対話が見られ、協働的に課題解決に向かうことができた。

② 全体交流

新しい考えを知ったり自分の考えを確かなものにしたことで、育てたい数学的な見方・考え方により迫ることができた。

③ 自己選択

これならできそうだ、やってみたいと思う方法を選んで課題解決を行った。授業の終末で自己選択の場を設定することにより、自分に合う考えを見付けて主体的に解決に向かえた。

4 研究の成果と課題

出会いの工夫として児童と共に既習事項を整理しながら単元計画を立てることで、主体的に学びに向かう児童が多かった。協働的な学びを通して、自分ができそうな方法を見付け、数学的な見方・考え方の視点をもたせることができた。

より個別最適な学びを目指すためには、協働的な学習の中で自己決定をしながら学びに向かう意欲を高め、どの児童も正しく学びを身に付ける手立てを様々な単元を通じて継続していく必要がある。